

はしがき

本報告書は、平成 26 年 11 月に実施された国際会議「第四回日韓ダイアログ―日韓国交正常化 50 周年へ向けてのメディアの責任と役割」（於：ソウル）の議事録および要旨・各種資料を集成したものです。

5 年計画のもとで本「日韓ダイアログ」が開始された平成 23 年から約 4 年が経過した今日、日韓関係においては残念ながら国交正常化 50 周年が近づくにつれて悪化の度合いが進むという、一面においてアイロニカルな状況が現出しています。その原因については、両国の関係がかつての垂直的な関係からより水平的な関係へとシフトしつつある現状と意識との間のギャップが様々な対立をもたらしている、あるいは日韓双方に保守的な言動が強まっていることが相手方の行動にも影響を及ぼしている等々、さまざまな見解が披瀝されています。また、ではどうすべきかという解法に関しても、相手国に対する譲歩を断固拒否するものから、イシューとなっている事象における解決こそが要諦であると説くもの、そして、北東アジア地域を含むグローバルな秩序の変動という国際情勢のうねりの中で日韓双方が共通して取り組むべき課題が増えていることを認識すべき、といったものまで多様な意見が表出され、外交・学界・社会のレベルで両国関係の再構築が模索されているのが現状といえるでしょう。

ならば、そこにおいて両国のメディアはいったいどのような役割を果たす、あるいはどのように事態に関与するのでしょうか。しばしばメディアという言葉には「社会の木鐸」といった形容がともない、「公正」「中立」「不偏不党」といった枕詞と組み合わせられますが、メディアがいかなる「立ち位置」にあるのかを巡って当のメディア自身が苦悩する、という構図がしばしば見出されます。しかし、その「自己認識」がいかなるものであれ、メディア自体が日韓関係における一つの重要アクターであることは否めません。仮にメディアが客観性やバランスの名の下に自らの考えを一切織り交ぜず、生の情報だけを伝えようとしたとしても、情報の取捨選択・切り分け・発信という過程それ自体がメディアの「メッセージ」となるのであり、メディアは社会の動きのサイクルの中から離れた存在ではあり得ません。アクターとしてのメディアが日韓関係の現状と今後の課題をいかにとらえているのかは、他のアクターの行動と同様に常にチェックされる必要があります。このような問題意識を踏まえて行われた第四回の会議では、日韓両国の主要なジャーナリストや有識者が国交正常化 50 周年を前にしての現状について率直な意見交換を行いました。今回の会議でも発言者の名を特定しない「チャタムハウス・ルール」が適用されましたが、その模様を収録した本報告書が、関係各位に今後の日韓関係再構築のための示唆を提供すること、そして同時に「メディアと日韓関係」についての「生きた資料」として機能することを、主催者として強く願う次第です。

未筆ながら、ご多忙のなか今次会議のためにご参集くださった参加者の皆様、厳しい状況の中で会議の円滑な運営と報告書の作成のためにご尽力いただいた関係各位、そしてこれらすべての過程において多大なご支援を賜りました株式会社ロッテに厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 日本国際問題研究所
理事長 野上義二

目次

はしがき.....	i
目次.....	iii
プログラム.....	1
参加者リスト.....	3
発表およびディスカッション 要旨.....	7
▶ 開会辞.....	8
▶ セッション 1: 国交正常化 50 周年—過去と未来への照明.....	8
▶ 基調講演.....	15
▶ セッション 2: 東アジア情勢に対する日韓両国の視角.....	15
▶ 基調講演.....	22
▶ セッション 3: 両国の言論報道の現状と課題.....	23
▶ セッション 4: 総括討論.....	29
▶ 閉会辞.....	35
▶ セッション 5: 学生たちとの対話(特別セッション).....	35
発表資料.....	41
議事録.....	87
▶ 開会辞.....	88
▶ セッション 1: 国交正常化 50 周年—過去と未来への照明.....	90
▶ 基調講演.....	113
▶ セッション 2: 東アジア情勢に対する日韓両国の視角.....	115
▶ 基調講演.....	140
▶ セッション 3: 両国の言論報道の現状と課題.....	142
▶ セッション 4: 総括討論.....	164
▶ 閉会辞.....	178
▶ セッション 5: 学生たちとの対話(特別セッション).....	179

＜※本報告書内の発言はすべて発言者個人の見解に基づくものである。また、本報告書のすべての発表資料は、オリジナル・対訳版ともに、基本的に会議当日に配られたものをそのまま掲載している。ただし本報告書の趣旨に沿って発表者名を削除したほか、明らかな翻訳ミスなどについては修正を施した。＞

